

## 1-6 気温上昇や降水量の変化等による釧路湿原の水環境・生態系への影響調査

大項目	小項目	チェック	チェック項目	備考
影響予測手法 及び予測結果	(影響予測手法) 現況の再現性	○	現況を再現できている	釧路湿原自然再生協議会において構築され、釧路湿原の現況再現性が確認された水循環モデル及びL-Q式を使用。
			現況を概ね再現できているが、一部現況の再現が困難な点があった	
			現況再現を実施していない	
	(影響予測手法) 他地域での応用可能性		気候シナリオを入れ換えれば、他地域でも実施可能	その地域における現況再現性が確認された水循環モデル及びL-Q式が必要。
			気候シナリオに加え、他の入力データを入れ換えれば、他地域でも実施可能	
		○	本調査の対象地域のみ利用できる	
	(影響予測手法) 応用に必要な技術レベル		多くの行政担当者が自ら実施可能である	水循環モデルを用いたシミュレーションの実施には、高度な専門知識が必要。
		○	気候シナリオや影響予測モデルを扱うことができるコンサルタントや研究者のサポートが必要	
			研究者等の指導の下でなければ実施は難しい	
	(影響予測結果) 活用可能性		行政の活用の観点から、妥当と思われる予測結果が得られた	既存知見の不足等により、湿原植生等の生態系への影響の予測が十分に実施できなかった。
		概ね妥当な結果と考えられ、行政で活用が可能であるが、さらに検証を実施することで、より精緻な予測結果が望める		
○		行政で活用するためには、引き続き調査やデータ収集などが必要		
適応オプション	適応策の妥当性		革新的な適応策を提示できた	釧路湿原自然再生協議会において実施されている再生・保全事業が、適応策にもなりうることを提示。
		○	影響予測結果に対応した適応策を提示した	
			影響予測結果と必ずしも一致しないものも含め、分野の一般的な適応策の提示を行った	
	導入可能性		他地域で実施・導入が可能である	釧路湿原自然再生協議会において実施されている再生・保全事業が、適応策にもなりうることを提示。
		○	本調査の対象地域でのみ実施・導入が可能である	
			本調査の対象地域で導入するには、さらなる調査、検討が必要である	
	他分野との関連性	○	他分野に相乗効果や副次効果が生じる	釧路湿原の再生・保全が、釧路川下流部における水害の抑制にも効果的であることを提示(Eco-DRR機能)。
			対象分野のみに効果がある	
			他分野にマイナスの影響を与える可能性があるため、導入の際に留意が必要である	
	適応策の多様性		適応オプションを多様な視点から5つ以上提案できた。	既存知見の不足等により、湿原植生等の生態系への影響に関する適応オプションの検討が十分に検討できなかった。
		適応オプションを5つ以上提案できたが、調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られていた		
○		調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られたため、提示できた適応オプションも限られた		

(※1) 現況の再現性とは、現在の状況を予測モデルが再現できている度合いのこと。通常、将来予測を実施する前に、モデルの妥当性を確認するため、現在の観測値等を利用して、予測モデルが現在の状況を再現できているか確認している。